

新しい住生活スタイルに関する一考察

○加藤玲子*、小笠原章*、繁田明*、戸田樹生**、西村和代**
(*花王(株)、**セゾン総合研究所)

【目的】本研究は、今後の住生活スタイルの方向性を探ることを目的とする。90年代初頭のバブル崩壊を契機に社会環境が大きく変化し、自由に生きやすくなった反面、経済的・生活的に自立し他者との関係性を築く必要性が高まっている。今後、自分なりの価値観をベースに新たな生活スタイルを模索する人々がますます増えていくと考え、セゾン総研では、「自立型社会」あるいは「男女共同参画社会」とも称される21世紀の社会で個人に求められる要件は、自己充実(私生活重視)、社会的自立、社会・公共性という3つの側面であるとみなし、3側面を表現する指標を作成して生活者像の変化を探っている¹⁾。なお、それらの3側面から構成される概念を「自分化」と命名している。

この概念を住生活領域に応用して、住生活における新しい生活スタイルの進行状況やその特徴を探ることにした。

【方法】セゾン総研の指標を参考に住生活に関する指標を作成し、首都圏の成人男女1300名にアンケート調査を実施した。その結果から、新しい住生活スタイルを実現していると思われる人を抽出し、自宅を訪問してヒアリングと現場観察による定性調査を実施した。

【結果】住生活において新しい生活スタイルを実現している人は全体の6%(男性5%、女性8%)。彼らは年齢によらず好奇心旺盛であり、求めるものが明確であること、縁故だけではなく自ら選択した交流の輪を持ち、社会活動への関心も高いなどの特徴を有していた。また住まいを、こだわりと統一感を持って設え自分の好きなことに没頭できる癒しの場としてだけではなく、他人をもてなし楽しませる交流の場としても位置付けていた。

1) SRI 総合研究 11 「自分化」の研究：個の自立がもたらす生活者像の変化，セゾン総合研究所(2000)